

仏国土の建設

無教地

それは日本でも有数なる教育県での出来事であった。

ある田舎の学校の一女先生が校外授業を終つて子供を引率して帰つて来る途中でのことであった。先生が知らない間に、子供と子供とが喧嘩して一人の子供の手を折つたのであった。こうしたことは至る所でよくある出来事である。

手を折られた父兄は怒つた。そして荒々しい態度と物すごい言葉で、この女先生にあてて学校に怒鳴りこんで来た。「子供の手を治せ。四の五のぬかせば、徒党を組んでやつつけるぞ。一体どうしてくれるんだい！」女先生は震え上つた。そして薄給の中から、金五十円を校長に出して謝罪してもらうことにした。何の間違いか校長は、その金を包み、自分の名義にして、お見舞いに行つた。だがその父兄は静まらなかつた。「校長でも五十円持つて来たのに当の受け持の女教員はどうしたのだ。」その態度はますます物凄い。哀れ女先生は、学校の帰路、毎日その宅を見舞つて、その都度何かを持つて行つたが、あまりにも強い刺激はこの女先生から心の平和と統一とを奪つてしまった。女先生は食事を摂らなくなつた。そして気が狂つた。病院の人になつた彼女は子供の名を呼びつづつて死んで行つた。

この県にこの四月から奉職した県師範出の女先生は泣いてこんなことを訴えた。尋常三年と言えば可愛いさかりである。一年生ほど手もいらぬし、五六年生ほど教材に骨も折れない。だがこの女先生が受け持つた尋常三年は、彼女にとつての地獄であつた。赴任した日の最初の授業は唱歌であつたが、型の如くオルガンを奏しても、礼をする子は一人もいない。壇上から号令しても聞く子は一人もいない。

教場は大騒動が続いて如何とも手のつけようがない。一時間そして一日中、何も出来なかつた彼女の泣かうにも泣かれない苦しい心を察することが出来る。あまりのこと、二年生の時の受け持ちの女先生に尋ねて見たら、二年の時は静かにお授業したとのこと。聞いて見ればこうである。子供を一列にしておいて子供の後にまわり、背中に拳骨を一つ宛あててゆく、そうして授業にとりかかれとのことであつた。まるで子供を猛獣扱いの授業ではないか。純真な若い学校出の女先生に何でそんなことが出来よう、学校で習つた教育学や教授法とはあまりにも隔りのあるこの現実ではある。温室の花のような附属の子供とは似ても似つかないこの自然児の中に立つて涙の苦闘は始められた。

これが教育県だと言われる某県の田舎の現状である。これでは女先生たちはまるで命がけではないか。何故に子供がこんな様子であるのか。理由は簡単であり明瞭である。大衆教育が出来ていないのだ。由来、禅宗でも、真言でも、法華でも、真宗の寺のある所ほどには大衆の上に正しい大法を植えつていくことが出来ていない。或は全く仏教徒とは名のみの地方さへある。寺とは坊さんのいる所、僧侶とは葬式をする人、人でも死なねば寺などに用事は無い。この県も亦、大衆の宗教々育の出来ていない国である。人は教えられざる以上、文化人となることは出来ない。虎狼を広野に放つたように、唯自分の利己心のままに動いてゆく。私は、親鸞聖人の血潮の流れ

いる国を有難く思う。正法に育まれている地を尊く思う。如来の名の聞ゆる地に生きていく人たちの幸福を思う。

吾人の信条

現代は無宗教時代である。無宗教を持つて誇りとさえする時代である。更に進んで宗教否定の時代である。だが、吾等はどうな嵐の中に立とうとも「宗教のない所に真人生はない」との断案をどうすることも出来ない。かくの如く信ずるが故に、如何に恵まれない時であろうと、世相であろうと、全身全霊をあげて叫ばざるを得ない。如何なる苦難の中に立とうとも、この運動を進めざるを得ない。

以下吾人は、所信を披歴して本団運動の目標と指針とを明瞭にしたい。

文明と文化

文明必ずしも、文化ではない。

文明人必ずしも、文化人ではない。

あらゆる場面に応用された電気、整備した交通機関、精巧なる武器、驚くべき通信機関、あらゆる科学、化学等々々、日に日に進んでゆく都会、その文明の中に躍る野蠻を見よ。大都会ほど不可思議な存在はない。文明の唯中に存在する非文化を見よ。

未教育な大衆は、自分勝手な功利的な欲望を、様々な神を造って、その中に移し、呪文や祈祷をなしつつその前に拝跪する。大阪の最も繁華な千日前で、アフリカの野蠻人のような非文化群幽霊群を見出すではないか。

お稲荷さんの御繁昌、続出するあやしい祈祷所、さては生神様、それが無教育な人たちだけかと思えば、堂々たる大学教育を了えた紳士や、高等教育をすました奥様迄がそうした迷信の中に堕ちてゆく。信仰とは、病氣平癒、家内安全、運命打開、金儲け等々を神に祈願することだとさえ思われている。文明の中におどる非文化、現代はどそれのほげしい時代はない。正しい宗教が勢いを失う時、それに反例して迷信狂時代を出現する。

一体これは誰の罪であるのか。

使命その一

迷信はこれをただ単に亡ぼすことは出来ない。教育によつて正法正信に揚棄するより外に救いの道はあり得ない。

光明団の使命の一つがここにある。日本人を狐の前に拝跪させていいものか。迷信の鎖でつないでいいものか。灰色な幽霊群のままにしておいていいものか。盲のために全財産をまき上げられたり、一ヶ月何円という金を、神の御利益を買う費用に使われたり、愚にもつかないことに右往左往する大衆をそのままにしておいていいものか。

戦え、迷信と。だがそれは決して頭から迷信を罵倒することによつては救われぬ。正しい智慧におきかえることだ。さ迷える大衆に大悲を感ずる者よ、起て、大衆の中に、六字の旗を進めて智慧光の恵みに万人を蘇らせよ！

使命その二

人生がただ精神的問題だけで解決がつくというのではないが、明治以来の日本の教育方針は、東洋の幽玄な思想にはふりむきもしないで、一も西洋、二も科学と、知識偏重の教育をして来た結果は、日本固有の尊い精神生活すら亡ぼして来たではないか。東洋のゆきかたは全一なる生命にふれようとする。戦いの場にすら、円融なる道義を見ようとする。全一なるあるものを把握して、全体としての人生を成就しようとする。西洋のゆき方は分析しようとする。分割しようとする。ただ単に論理づけようとする。塩は白い。塩はからい、塩は粉であるということは正しい。だが、そのいづれもが塩の全体を表わしてはいない。「涅槃」という思想をどんなに分析し、概念化しても、涅槃のほんとうを知ることが出来ない。涅槃とは寂滅である。煩惱を滅することであるとせば、西洋人はすぐ、人生の逃避、森林生活だと考えるということである。

全体としての人生をつかむこと、そうした精神生活のない所には、何等のゆとりがない、ゆとりのない所に真の力はない。東洋人を東洋に還せ！我等の祖先は今少し、天地人生の深さを呼吸する文化人であった。ああ。現代人はあまりに軽薄だ。浅薄だ。無理想だ。無信念だ。

使命その三

宗教だの精神生活だの言った所で、それは生活が豊かになってからのことである、³という人がある。何という大きな間違いであるか、それならば古から人生の燈明台であった聖者たちは、ある程度の富を造つてから道を求めたのであるか、或は又、所有財産に比例して聖者が出来たのであるか。尊き精神文化の建設は決して富に比例はしない。淋しき村の谷間に、人類を代表するような希有人もいれば、金殿玉楼に住む野蠻人もいる。悪魔もいる。

人生の真の勝利は富にあるのではない。名にあるのではない。享樂の世界にあるのではない。はつきりとした大道の生活、大法の獲得、真に我を生かす所にあるのだ。誰でも何時でも何処でも知ることの出来るこの人生肯定の歡喜、これを伝ふるは誰の使命ぞ。

使命その四

親鸞聖人の如く、衷心の魂の声をごまかさず、深い願いのままに、はつきりと如来の本願にふれるまで求道して、汝の一生を仏化せよ。その時一人の仏の子は、家庭の光となり、道となり、明るい歡喜の中心となる。家庭の電燈、家族の火鉢、家族をやがて仏化せよ。三年たつても家族一人をすら動かし得ない信仰があるならば、我等は、その信仰は一種の趣味であり道樂でしかなかった、と言われても仕方がない。

先ず家庭総ぐるみの求道、合掌、それほど人生に幸福があるものか。家庭の仏化！汝に課せられたる重大なる使命である。

使命その五

親鸞聖人が如何に多く「金剛」という文字が使われたかに注意せよ。

如来は金剛である。信も亦金剛である。

如来の金剛力に目覚めて、早く独立者となれ。精神、この金剛力に生き、肉体も亦この金剛不壊の力に生きる。

聞くことのみにおわつて、隣人へ、社会への、はたらきかけがなければ声聞である。伝道を知り、はたらきかけを知つて、求道がなければ独覚である。大乘菩薩道はこのいづれでもない。

語らずにはいられない。はたらきかけずにはいられない！ その必然の願求、そこに又限りなく聞かずにはいられない求道の願心が強く動く。この二つの願求が、我等を小乗から救う。

求めよ！ 而して働きかけよ。

迷妄深き汝の村へ！ 汝の町へ！ 汝の国へ！

金剛力を以つて汝の社会を仏化せよ！ 汝の村を、汝の国を仏化せよ！

仏国土の建設は我等に与えられたる唯一の使命である！